



尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長

写真家 村上宏治

【八朔巡礼物語】

第3話

八朔の父と称される、
西条農業学校 第一期卒業の田中清兵衛は…、その一

『八朔』と漢字で表すと少し硬い感覚で印籠の様な格式を感じ、『はっさく』とひらがなで書くと柔らかい感覚で親しみを感じ、『ハッサク』とカタカナで書くことフルーティーな感覚となります。日本語で面白いですよね。八朔という果実を、流通の中の一つの商品として観るか。八朔はその昔、保存の効く栄養ドリンクであり、薬膳としての果実と観るか。八朔という、新しい柑橘に夢を託した人間ドラマとして観るか。様々な観方があります。その八朔に情熱を注ぎ、幾多の困難を乗り越え、今にその八朔を伝えた人がいました。

田中他人造

……後の田中清兵衛

因島田熊の資産家・田中家に男子が生まれます。その家にしばらく続いてしまった、幼子の余りに早い死に対して、元気に育つて欲しい親心から、他人造と命名し、生まれて間もなく里子に出された男の子。その子は健康に育ち、親元である田中家

に戻ります。田中家代々当主として継承してきた、清兵衛とその名を改め、後に八朔の父親とも称された、あの田中清兵衛として、多くの功績を残していくのであります。



八朔を全国へ普及させたその功績によって建てられた田中清兵衛氏(明治二十八年(一九〇五年)昭和三十一年(一九五六年)の銅像。(因島 密厳浄土寺境内)

田中清兵衛氏と因島柑橘農家の八朔奮闘記

明治から大正時代にかけて、因島は将来有望と思われる八朔を含め柑橘の栽培を積極的に進めていきました。こうした状況の中で田熊村東組青年会の若い力により、力強く山々を開墾し産地づくりを進めていきます。格別の奨励策もない暗中模索の時代、苦しい中でも若者たち



山を開墾している当時の様子。

は無我夢中に頑張ったと、記録は伝えていきます。

そこに希望の光が射しこみます。明治四十一年(一九一〇年)に、広島県立西条農業学校が開校。その第一期卒業生に田熊出身の田中清兵衛氏の姿がありました。卒業後、家業を継いだ清兵衛氏が、新鋭の技術指導者として産地拡充の先頭を切り、島の柑橘農業に情熱を注ぐ傍ら、西条農業学校後輩の育成にも力を注ぎます。田熊に帰った清兵衛氏が率先して活動する姿は、多くの人

に夢と希望とを与えたと記録に残ります。
西条農業学校後輩の実習の場として、田中家の畑を提供し当時最先端の、農業技術への挑戦と試行錯誤を重ねていきました。学生たちは田熊の港から、清兵衛氏の畑まで隊列を組んで行進していったとも。



学生たちと柑橘畑にて。(清兵衛氏は写真手前中央)

共に考え・共に働き・共に食べ、その一切を田中家が賄ったという記録が残っています。
西条農業学校に入学する学生の多くは全国各地の大規模農園の子息でした。彼らは、その実習に対して情熱と感謝をもって取り組み、清兵衛氏と共に柑橘農業への未来を切り開いていきました。



学生たちと一緒に食卓を囲んで食事をする田中清兵衛氏(写真中央)

実習を重ね西条農業学校を卒業すると、故郷の農園に帰る者、中には更に進学し大学で研究者となり、後に大学で教鞭をとる者も生まれました。清兵衛氏に感化された若者は、全国へと旅立ち、日本の柑橘産業のパイオニアになっていきました。

清兵衛氏の情熱の源

高等教育と田中長三郎博士との出会い、そして田熊の地が日本国内でも特異な場所であった事。それらが八朔を、柑橘を愛するプライドとなつて清兵衛氏の情熱の源であったのではないのでしょうか。

田中長三郎博士は、柑橘属の分類研究の世界的権威として、ウォルター・T・スウィングル博士と並び称され、生涯に渡って研究を重ね、分類した種は柑橘属だけで一五九種にもなります。スウィングル博士と長三郎博士は、因島に特に興味を持ち、初めての来島時から、後に長三郎博士は数十回と来島を重ねています。

清兵衛氏は、柑橘生産者と博士を囲んで語り合った貴重な時



収穫した柑橘の選果の様子。(清兵衛氏は右建物奥の壁面)



田中長三郎博士(一八八五年〜一九七六年)日本の農学者。中でも柑橘属の分類研究の世界的権威としてウォルター・T・スウィングルと並び称される。

間を、また若き西条農業学校の生徒たちにも語らいの場を設けられたことは、彼らにとつても大きな財産となった事でしょう。そうした時代の中、八朔は全

国へと知れ渡り始めていきます。